



特選

## あしたの姉弟

野瀬町  
水沢 郁

京都島原の太夫道中の、かむろと傘持ちを従えての、地をあやすかのような内八文字歩き（内八文字歩き）の艶麗さに皆が息を呑み、スマホを笏（しやく）みために打ち立てて写メ動画、「こったい」の装いすべてを剥ぎ取ろうという勢いに、いっこのかまわぬ太夫は観衆引き連れて参道をしやなりしやなり練り歩き、鳥居前の電車線路と並行する道を隔てた控え所に消え去ろうというところであった。

で、居抜きにあったような下社（もしも）の境内は、その余韻が収まり着くところを探しあぐねているふうだった。

初夏の逢坂山の薫風が境内を吹き抜け、

井上次雄  
杉山啓志 選

木々の青葉若葉が一枚一枚サラサラめくられ、銀の鱗となった陽光が降りそそいでいる。詩人会の例会で、会員のキリコさんが、おもしろい催しがあるからとみんなにチラシを配っていたことがあり、それを覚えていて見物しに来ていたのだが、吹き抜ける風がまことに心地よく、声楽ソプラノ、よし笛、狂言、ピアノ弾き語り……つぎつぎ練り出される芸能演目に、したたるように風が命を吹き込んでいく。

関蟬丸神社芸能祭の演目は、能楽『蟬丸』の「道行き」奉納に始まり、琵琶演奏で終わることになっている。太夫道中の次は、最後から二つ目の演目のはずだった。出番である地元の和太鼓保存会の面々が、出演準備に手間取っていたわずかなすきだった。

弊衣蓬髪（へいゐほうぱつ）の年老いた女が風のごとく、舞台となっている拝殿に駆けのぼり、プログラムにはない、髪を振り乱しての妙な語りをはじめたのだ。あまりにも突然のことだった。誰も

止めなかった、誰にも止められなかった。女は竹製の長い鳴り物を用いて、何やらジャラジャラやり始めた。誰かが、目前の光景に、あ、という声を発したが、次の瞬間には同じ者か別の者が、ほう、という嘆声を吐き出していた。

「ただ今説きたて広め申す御物語、国を申さば近江の国、関大明神上社（かみしや）の弓手の脇に『ふたがみ』と言われておわします御本地をあらあら尋ねれば、これもひとたびは凡夫にておわします。人間にての御本地を尋ね申すに、時を申せば嵯峨の御代、国を申せば豊前（ぶぜん）の国、光正なる有徳人のましますが、男子にても女子にても、子という字があらざれば、……」

人々のざわめきが、ひたひたと波紋を生み出していく。芸能プロから派遣されている司会進行の女が、ここで止めた。

「あらあら、ご熱心な演技ですが、今日のプログラムにはありません。みなさん、ごめんなさい。いったい、どなたなのでしょうね。御奉納、ありがとうございます」

その声を待ちかねていたかのように、黒いイベントウェアの実行委員の男たちが登場し、女はなかば力づくで舞台から引きずり降

ろされてしまった。

「蟬丸さまはあらゆる芸能音曲の神様でいらつしやいますから、ただいまの飛び入り、びつくりなさりつつも、さぞお喜びのことでしょう」

司会の女がそう取りなしたときには、舞台横の社務所から、人々のとがめる声ごえを引きちぎるようにして、みずぼらしい姿の女は神社からまろび出て行った。ゴキブリのような逃げ足の早さだった。老婆のわりには胸がふくよかだった。

踏切の警報音が鳴り始めた。

老婆?……キリコさんだ。キリコさんに違いない。キリコさんはそんな人だ。

キリコさんから、あのメールがあつたのは、一月半ばだった。

シンガオくん、元気にしてる? あたしは自業自得とはいえ、新年早々に行われるかるた大会を見学しに行ったあと、一日中ほつつき歩き、風邪を引いて、それが長引いてあやうく肺炎になるところだった。そんなことが長々と書いてあつた。さらに伝えたいことがある、ということだった。

ぼくが去年、この地の詩人会の門をたたいたとき、どう言っているのか分からず「ニューフェイスです」と、恥ずかしい言い草で簡単な自己紹介をしたのだが、実際、二十歳代

はぼくとキリコさんだけで、あとはどう見ても六十を越えている人たちばかりだった。世代間の感覚の違いもあったが、ぼくたち二人はいつもトシの若さをうらやましがられていた。それにキリコさんとは不思議にウマが合った。だから時おりメールのやりとりはあつた。

駅の中にあるパン屋のイトインで会うことにした。客の回転が速く、ちよつと長居しても引け目を感じることはなかったが、周囲をはばかりぬキリコさんの声だった。

キリコさんは、出家するわけではないけれども、自分もこの先いくつまで生きられるかわからないし、この際、今後の人生を先取りして米寿の祝いをやってしまうのだと、いきなり言った。それから話のジェットコースターにぼくは振り回された。

こんな、とんでもないことを言っていたキリコさんが、翌月の詩人会の終了間際に久しぶりに姿を現した。まさに老婆の姿だった。

「ジャジャーン……還暦も喜寿も過ぎちゃったって感じでしょ」

合評会の進行役を務めている男は、部屋に入ってきたキリコさんの姿を見るなり立ち上がったが、すぐさまへなへなど座り込んでしまった。

「どうしたの、キリちゃん、その格好」 「役者

さんになったの」「今日はもう終わりだよ」……

詩人仲間から次々に言葉が飛び交う。ぼくは「本当だったんだ」とつぶやくだけだった。キリコさんの説明によると、舞台向けの老人メイクや特殊メイクもやっているというスタジオに向いて、老婆に化けてきたということだ。あつげらかんとキリコさんは言った。その後も、居合わせた詩人たちから、さまざまな言葉が飛び交ったが、キリコさんにはここに老婆の笑顔で応えつつ、「じゃあね、みなさん。詩も作ってますよ。また来月来ますからね」と足取り軽く研修室を出ると、市の地域文化センターを後にした。

詩人たちは、キリコさんの闖入で中断された会後の諸連絡や会報の発送準備に、再びそろと取り組み始めた。自然農法実践家でもある八十歳の詩人会会長が、「ああいうの、ゴスなんか、……ゴスペルって言うんでしたっけ」と誰に言うとなくつぶやいた。

「コスプレ、ですよ」

会員名簿を確認しながら女性会員の一人が言った。

ぼくが「あれはキリコさんだ」と思い至った瞬間から、その日の様子をありありと思いつ浮かべていて、少しく間があつた。

観客席のパイプ椅子を離れ、キリコさんを追って境内を抜けようとしたときには、この私鉄に乗り入れている古都の市営地下鉄の、水色と白の瀟洒な電車がゴーゴーと向こう側をふさいでいた。この日、踏み切りの安全のために近くの駅から駆り出されている警備の駅員に、キリコさんの行方について尋ねようかとも思ったが、いらぬ詮索をされそうで、ぼくはそのまま遮断されていた。

轟音が行き去り視界が開ける。

線路を越え、踏み切り脇の歩道を左右に遠く見渡しても、キリコさんの姿は見えなかった。赤信号の長い長い遮りのあと、横断歩道を渡って向かいに渡った気配もない。道の向こう側の歩道にもそれらしき姿はなかったのだ。であればこの日の特設駐車場に向かったに違いない。そこに車を停めておくかタクシーを待たせておいたのだろう。二、三分の時間差なら、それしか考えられない。あとは……テレポテーションだ。キリコさんならやりかねない。

ぼくは何かにひかれるように関蟬丸神社の上社に向かった。国道一号線沿いに、ここから歩いて十分もかからない。そこには逢坂の坂神が祀られているし、芸能神としての蟬丸も合祀されている。確かキリコさんと思しき芸能者は、関明神の「かみしや」と言って、

その由来について語り始めたはずだった。だったら上社に向かったのかも知れない。そう思ったのだ。

山に挟まれて、国道と電車線路が細長い羽目板のように並行し、その板のすきまの溝のようなどころに、資材置き場や小さな民家がぼつぼつへばりついている。周辺に比較的民家が建て込んでいる町中の下社とは立地条件が違うのだ。そもそも駐車スペースもないし、この山峡を細々と走る私鉄電車で最寄り駅まで行ってそこから引き返すとしても、国道沿いに歩かねばならない。

ときおり、狭い歩道をトビウオのように向かってくる逢坂越えのロードバイクとあやうくすれ違いながら上社を目指す。国道と立体交差する名神高速道路を仰いで少し歩くと、道路横断用の信号がある。ボタンを押し、青信号を待つて向かいに渡った。

急な石段が迎えてくれる。それを二十数段上ると赤い質素な木の鳥居があり、さらに斜面の石段を上り詰めると拝殿のある広場に出る。社殿は国道を睥睨するように控え、車の通行音は神域に吸い込まれてしまうようだ。夕湿り、という言葉はあるのだろうか。初夏のさわやかな頃だというのに、神社は皮膜のような水に浸されているようだった。人は誰もいない。

境内をくまなく探してみると、やっぱりキリコさんがいた。

拝殿からさらに石段を二十段ほど上り、また五段上ったところに、広さ三畳ほどの本殿がある。その薄暗い一角に、膝を抱いて座る子どものような、若い老婆の姿があった。

「誰か、来ると思っていたわ、……君だったのね」

「普通は誰も、こんなところ来ませんよ。ぼくが来たのも偶然と言っていていくらいですよ。ほんと、どうかしてますよ、キリコさん、ここに」

「あのね、……説経節という中世の芸能にはまつてるの。一種の語り物よ。ちよつとやりすぎたけど、大勢の前で、一度それを披露してみたかったの。シンガオくんは知っているかな、説経節。安寿と厨子王のお話もあるのよ」

キリコさんは大きな竹のブラシみたいなものを取りだして左手に持ち、右手の細い棒でジャラジャラと鳴り響かせる。

「宇佐神宮に行ってきたの。そこで大昔の巫女さんに乗れられて、ときどきその女の人になつちやうの、私」

競技かるたの全国大会を見物しに天智天皇を祀る神社に行った際、二羽の土鳩に導かれるようにして、近くにある宇佐八幡宮に迷い

込んでしまったというのだ。その境内でしばし意識をなくしていたそうだ。それから四、五日、熱にうなされ、夜になると夢遊病者のように外をさまよい歩くこともあつたらしい。その末に神のお告げをありありと聞いたというのだ。それにしたがって、勸請元のいわば本家の、大分県の宇佐神宮に向かい、なにかお詣りするうちに、本格的に憑依された、ということらしい。老婆に化けて詩人会にやつて来たあのとときの二ヶ月前のことだ。キリコさんは思うところあつて高校を一年で中退して、その後アルバイト先を転々としたが、三十歳を前にして生き直しに目覚め、現在は単位制の高校に在学している。仕事としては湖上を遊覧する観光船のスタッフをしている。

以前の彼女の言によれば、そのバイトも毎日ということではなく、四連勤・五連勤もあれば、休みの続くときもあるということだ。シフトを調整すればある程度の期間、九州に出向くような時間的余裕は十分にあるだろう。それに彼女の気まぐれをもてあましている看護師のお母さんからの、ため息混じりの金銭の援助もあるはずだ。

「そこで、さっきの話も仕込んできた、というわけですか」

「仕込んだのじゃないの、乗り移られたの」

「ん、じゃあ、セツキョウブシってというのは」「あ、これは、古本屋さんで見つけた本に書いてあつた。あの憑依の内容を表現するにはこの賤民芸能しかないって思った。それで『ささら』という鳴り物もネットで調べて買った。これよ……」

さっきの竹製のものだ。

「これで四千五百円」

「ま、珍しい楽器みたいだから、そんなものですかねえ」

「そうだよねえ」

「じゃ、関蟬丸神社の縁起、続きをやつてくださいよ」

ぼくは少しくらいなら聞いてもいい気がしていた。暗くなるまでにはまだ時間がある。明るいうちなら、彼女の異形もそんなに変に思わない。

「じゃ、始めるわね。どこまでいったかな。

そうそう、豊前の光正の説明よねえ。

……子という宝のなきを夫婦ともども嘆きに明け暮れ、のう御台や、汝とともに十歳とせになるも子がないのが何より無念よな、汝はいかにと申されば、御台所はきこしめし、昔が今に至るまで、子のない人は、いずかたの神仏にも参りて祈れば子種授かる由、光正殿も申し子なされとあれば、光正、げにとおぼしめし、宇佐八幡におこもりある。……」

「あの、途中で悪いんですけど、意味がよく分からないところもあるし、訳すというか、今の言葉で、お話しみたいにしてくださいよ。古文じゃ難しくて」

「あらそう。頭の中にこびりついているものが、そのまま口をつけて出てくることが多いんだから仕方ないわ。でも、分かりやすく言い直すわね。しばらく我慢して聞いてよ」

「はい、分かりました」

キリコさんに従うしかなかった。

「長者夫婦は身をそぎ口すぎ、二の御殿の比売大神に七日七晩不乱に祈れば、大神、いかに長者夫婦の者、これまで参り、子申すことゆゆしきことなれど、汝らに不憫のことあり、まるが語つて聞かせ申す。

……というのはね、二人には前世の因縁があつて、ツバメやキジに無益な殺生をしたために子どもができないと言うのよね。

さるにても、心一つに申し子せしゆえに、また、長者の有徳、とうに聞こえしゆえ、近江の逢坂山に授けし神の子を汝らの子とせん。

……なぜ逢坂山かというとね、ちょっと話が入り込んでくると、筑紫の太宰府に赴任してきた小野朝臣岑守みねもりという人がね、その前年は近江守で、逢坂山に坂神を鎮座せしめたのよ。その縁で、比叡の根本中堂建立鎮

の際に、筑紫より招かれた盲僧が築いた常楽院の二代目満市坊という人に、神の子を授けてあって、それを光正夫婦の子にするというの。そしてね、またこの先十二支一巡り半するならば、御台の腹に男児を授けるつもりだと言ったのよ。でも、条件があるの。

汝らの子が生まれるまで、筑紫に赴きて、まるの命を受け、民草のために尽くすべし。と申すは、九州二島より大宰府へ訴状持ちたる者、その間、府の宿所に間借りし、あるいは村里の軒端に宿を借る。しかれども疫病不作相続き、いったん病を得て手足動かざれば、病を養う所なく、官民死を忌むゆえ路頭の人になされ、風霜にさらさる。飢え凍え、死する者十に七、八。岑守、之を心深く憂え、この者ども救わんと、一存にて、檜皮葺七屋の続命院を建立し、墾田百十四町を給し、以て飢えと病に備う。しかれども、善行久しく引き継がるるためしなし。いづれ墾田は廃田となり、院の屋上に草ぐさ生い繁ること火を見るよりも明らかなり。

……で、長者たる光正が岑守を助け、またその遺志を継げ、ということなの」  
「うーん、よく分かりませんが、ずっと後に生まれるという男の子が蟬丸？」  
「そうよ。光正夫婦はその後、小野岑守亡き後、いわば救民施設の続命院維持に命を懸

けたの、私財なげうって。で、満願かなう十八年目、七月の患い九月の苦しみの果て、当たる十月に、玉のような子どもを生んだっていうわけ。幼名は犬丸。でもね、あら、いたわしや、御台所は産後の肥立ちが悪くてみまかつちやったの。……それにね、犬丸は五歳のとき、はしかが原因で失明しちゃうの」

「あ、そうか。蟬丸は盲目でしたよね。お母さんも出産後、すぐ死んだんですか。ずいぶん高齢出産ですよ。十八年後なんて」

「そう、四十四歳の時。ありえないわ。でも、宇佐八幡の申し子だから、これは奇蹟ね。このとき、二代満市坊っていう盲僧のもとにいた姉のサカガミも、十二支一巡り半で、十八歳」

「サカガミなんて妙な名前ですね」

「能の『蟬丸』では、逆立つ髪カミの毛として登場してくるけれども、やはり坂の神様よね。サカガミはその名の通り、フジヨ、巫女さんだったの。逢坂山を本拠として各地を巡り歩き、神社の本地物を謡い歩いてた。でも、扱われ方は賤民、社会の底辺で貧窮を極めていたの」

「よく勉強しましたね。ぼくは蟬丸って言えば『これやこの……』っていう百人一首の歌くらいしか知らない。難しいことは分かんないですよ」

「普通そうよねえ。しかたがないわ。でもね、私にはサカガミが乗り移っていて、いろいろなこと教えてくれるの。そしてそれを広めなくてはならないのよ。これは役目だと思うようになったわ」

「で、蟬丸は、その後どうなるのですか」

「零落した父の光正は、よわい五十一。二代目満市坊のサカガミ養育同様、もらい乳をしながら必死で我が子を育てた。そして犬丸が目が見えなくなつてから二年後、七つになつたとき、意を決してその手を引いて太宰府から逢坂山に向かったの。盲僧の三代目満市坊に弟子入りをお願いするため。逢坂山に常楽院というお寺を開山した満市坊の名は、以後、二代三代と引き継がれ、琵琶奏者としての名声は筑紫にも聞こえていたのよ。光正親子はみちみちこじつき乞食しながら、山川左手に地乗りして、潮満ちどきの難波津を逆行く淀伏見、やれうれしやと四宮河原にたどり着く。でもね、王城近くの地を踏んで、光正ここで力尽き、哀れをとどめたり、なの。光正の亡骸は、めしいた子を引き連れての旅のつらさを知る河原の帳外者たちの手によって、茶毘たびに付されたの。それからみなは、いたいけな犬丸引き連れ、えいさらえい、えいさらえいと逢坂山の常楽院に届けたというわけ」

「ここで姉のサカガミと出会うというわけで

すか」

「うん。このとき姉は二十五、弟は七つ。サカガミは二代目満市坊に託された神の子。満市坊はある明け方、門前で泣いていた赤子の声で、この不思議な夢の神託から目覚めたの。以後、周囲の手を借りながらも必死で育てたのよ。ところが彼も突然病魔にむしばまれ、五十三歳で亡くなってしまうの。その臨終のとき、彼は、夢のお告げで聞いていた彼女の出自を、初めて打ち明けた。サカガミは流涕焦がれて、おおいに泣いたわ。彼女は物心ついたときから、母の存在のカケラもないことに不思議を感じていたけれど、それから自分分は人の子でないことを強く意識して生きるようになったの。そして育ての親の死から五年目にして犬丸と出会うことになる。やがておおいその子どもの素性を知っていくんだけど、驚きやらうれしさやらで身がふるえる思いがした。けれども、自分が神の子で、犬丸の姉に当たることだけはけっして明かさなかつた。父の光正も犬丸に対して、お前を逢坂山に連れていくのは、琵琶法師にするためだとしか言っていなかったの、犬丸だけが何にも知らなかった。その後十年近く犬丸は三世満市坊の厳しい指導を受け、師に従い歩き、常楽院はもとより、ときに坂本の山王権現や三井寺の門前境内で、また四宮河原を行

き交う人々相手に、語りや琵琶演奏の生活をしながらの、日々のたつき。サカガミが普段手にしていたのは鼓と爪弾くための弓。時には、盲僧たちの琵琶とのセッションもあったわ」

「見てきたみたいですね」

「そうよ、見えている」

「キリコさんは意に介さない。」

辺りが暮れなずんでいく。ぼくは場所を変えたかったが、話の流れから言つて、ようやく佳境に入っていくようだし、そうとは提案できなかつた。木々が、夜の空気を少しずつ吐き出していく。

「ところで……あたし、きれい？」

一七、八の女の子じゃあるまいしと口に出かかつたが、「決まってるじゃないですか」とぼくは言つてしまった。ぼくが、以前からキリコさんに惹かれていたことは確かだ。

今のふけ顔のメイクも、無理して女の一代記を演じる若い女優を感じさせる。

「……でしょ。うれしいわ。じゃ、またサカガミを呼び出すわ」

キリコさんは再び演奏に取りかかつた。ジャラジャラジャラというさらの音だ。

「……犬丸、日ごろの精進実を結び、弦かく指のはや撥一つ撥、三世の教え身一つに染みわたる音の見事さや、その恩をぞ返し撥、身

の奥掻き撥の、いずれ時ほどけ身とろけ、妙なる音色に乗りて天空へ……という具合に周囲も驚くほどの上達ぶり、高齢の三世満市坊が、この門跡はもうお前に譲るということで、一六歳のときに若くして四世満市坊の名をいただくことになったのよ」

「やりましたね、ついに。努力の甲斐あつて。父光正の願いもかなつたというところですね」

教科書通りの合いの手のよう、ぼくはキリコさんの反応が気になつた。

しかし、キリコさんはここで深いため息をついた。

「……この年、八五七年、文徳帝の最後の年に、それまで関としての必要もなくなつて廃止されてきた逢坂の関が、あらためて開設されて、関明神と称されるようになっていたの。……何が言いたいかといえね、ここからこの姉弟の神格化が始まるというわけ。あとづけね」

「よく分かんないです」

「あのね、あとで蟬丸と言われるようになる満市坊もサカガミも、ごく普通の人間だったということ。神の子といつても、祭り上げられるほどの奇跡も起こしていないし、人間離れもしていない。それにね……二人は常楽院を拠点にして、他にも盲僧や占術師や遊芸民はいたらうけど、ほぼ同じ空間で暮らしてい

たと言つてもいいくらい。姉サカガミは盲目の弟のことが、目を追うごとに、いたわしくいじらしく思えてくるのは当然だし、蟬丸の方は自分に優しく接してくれる年輩女性という以上に、好意を持ち始めたの。生身の人間として。惹かれ合う男と女の気持ちが生えていったのよ。……ところで、君はいくつ」「はたち、ですけど」

「そうだったわね。私は二十八。八つ違いね。……この二人の年齢差は十八。好き合う男と女に、年の違いはあんまり関係ないわよね」

ぼくは何かを見抜かれたようで、ちよつとたじろいだ。モーションかけられたとは言わないが、からかわれたのかもしれない。

「だって、犬丸は大人の女性の面影といえ、母の死後、妹に当たる叔母に面倒見てもらった時期があつたくらいで、ほとんどない。その顔つきの記憶も、目が見えなくなって以来、少年になつたその頃は、それこそ幻灯みたいにおぼろげで、輪郭もぼやけてしまつているの。しかし、声や匂いは記憶している。だから、縁あつて光正夫婦の子となつたサカガミに、それめいたものを感じることがあつたのよ、きつと。……ということは十分考えられる」「キリコさんのサカガミが、そう言つていらんですか」「それは、……ヒミツ」

すでに夏の虫がすだき始めている。

「十六歳になつた四世満市坊は、あ、……この人、後年、蟬丸という名前で呼ばれる人々の代表格だから、ここから犬丸や満市坊というのはやめて、蟬丸でいくわ。蟬丸は自分の掻き鳴らす撥の音色に、ときに切なくなるあまり、演奏を止めて、ふと夢想するの。神仏の与えたまう試練に理不尽なし。我が目に光入らぬはせんなきこと。されどわが頬の涙を恋しき人の細指もて今ぞぬぐえよかし、つてね。サカガミは、蟬丸哀れさのあまり、御目は瑠璃瑪瑙るりめう、開けよ見えよと語りかけ、心静かに鼓をたたき、開眼を祈つたことが一再ならずあつたの。でも、蟬丸には、サカガミの女の匂い恋しくて、たとえ指の形を手でさぐれたとしても、銀の柳葉のようなものは目に映ることがない。

で、蟬丸の恋心はますます募つてくる。サカガミは、神社の本地を説いてまわりながら、今で言えば青森のイタコみために口寄せもするし、邪馬台国の卑弥呼みたいに神意も告げていた。

でも、しよせんは当時の流浪芸能民、そのかたわら春もひさいでいたのよ。神聖と汚辱つて、一枚のコインの表裏みたいなもので、なんやかんやで、サカガミがそんなことに関わらざるを得なかつたその未明、四宮河原で

のこと。

互いに身を寄せ、弓と鼓と琵琶持つて語り奏でるひとときの、サカガミの気怠さ示す目の隈見えずとも、心でそれと察する蟬丸の、母者姉者への、女性にょしやうへの、執着妄念断ち切りがたく、サカガミに抱かれない、抱え持つ琵琶の代わりにサカガミを抱きたいと、いつになく身を近づけていく……。

ああ、この先は言えないわ。今日はここまで。……帰りましょ」

座り続けていたキリコさんが、突然立ち上がろうとして、ちよつと体勢を崩した。ぼくが支えようとして手を差し伸べたら、キリコさんは、「大丈夫、わたしは、おばあちゃんじゃないんだから」と、ぼくの手をそつと払つた。

―どうしてた。何してる。

キリコさんから久々に連絡があつたのは、あの奇妙な初夏の一日からずいぶんたった七月中旬の午後だった。

あれからぼくはキリコさんと連絡をとっていなかった。彼女からもなんの音沙汰もなかったし、その後二回あつた月例詩人会にも彼女は来なかつた。

ぼくはサカガミさんの告白も衝撃めいていて、お互い時間をおいた方がいいような気が

していたのだ。なんだかまたそれがぼくらの流儀のような気もしていた。

キリコさんの、湖上遊覧船「ヒューロン」での仕事は、いま夏場の書き入れ時で、土日はナイトクルーズもあるので、キリコさんのシフトの空きの、月曜日の昼前に会うことになった。場所は、例の駅構内のイトインのパン屋だ。

「お客さまが乗船する際のタラップとかね、船内レストランでの様子やらイベントやら、一番いいショットねらつてのスナップ撮影、その合間縫ってポップコーン売りやアイスクリーム販売、そりやもう大変なのよ。港に帰り着くときには写真の売りつけ。……シンガオ君、やってみる？」

キリコさんのその日のいでたちは、就活女子大生みたいな、黒のタイトスカートと白いブラウスだ。それにあのロングヘアをまとめ上げてアップにしているのがなんだかなまめかしく見える。それが二十七、八歳の桔梗の花みたいでさわやかでもあった。

とにかくもう一度あの場所に行ってみようということになって、タクシーで前回の語りの場所に行くことにした。

「関蟬丸神社の上社まで」と、「かみしや」を強調したところ、運転手は、あそこは勘弁してくれ、片側一車線だし一時停車でも危な

い、ということ、鰻料理屋の向かいにある蟬丸神社の辺りまで行くことになった。これは江戸時代に分社されたものだ。ここには国道から分岐する道もあるし、タクシーがウターンできるスペースもある。

タクシーを降りたぼくたちは、道路横断用の信号ボタンを押して道の反対側に渡り、数分歩き、また信号ボタンを押し、目の前をひっきりなしに通過する車を停止させ、国道を横切つてそのまま上の石段を上る。

以前と違うのは耳朶に貼り付くような蟬の声があることだった。ぼくたち二人は史跡好きな若い男女の散策と見えないこともないだろう。

キリコさんは前と同じ場所を選んだ。はぐれ鳥のような観光客がここにやって来たとしても、それならそれでもいい、とぼくは思った。キリコさんもおそらく同じ思いだろう。

『平家物語』って知ってるでしょ」

「はい」

「ここでは、蟬丸は醍醐天皇の第四皇子として出てくるの。おそらくお能の『蟬丸』はこれを受けて、帝になんらかの叡慮があつて盲目の『蟬丸』を逢坂山に捨て置いたとしている。そしてね、怒髪じやないけど、天を衝くザンバラ髪状態の『逆髪』が狂女として登場して、蟬丸の藁屋で再会を果たすというの。

サカガミは蟬丸の姉宮。二人とも貴種よね。これでドラマツルギーとしての悲劇性は高まるわ。確か『今昔物語集』では、蟬丸は、宇多天皇の皇子、敦実親王の雑色だったはずよ。雑用係とはいえ、ここでも高貴な身分につながらせているの。シンガオくん、これ、どう思う」

「どう思うも何も、ちよつと複雑だけど、元をただせばっていうヤツですかね、由緒正しきというか、世が世ならというか」

「こんなの、ウソよ、私が思うに。アイデンティティーって言えばかっこいいけど、誰しも、おのが出自や家柄を誇りたいっていう気持ち、どこかにあるじゃない？ましてや、こは盲目の琵琶僧やら巫女という芸能賤民、貴族階級を北極星みたいに仰いでいる存在だし、農民や漁民みたいに生産性のある仕事にたずさわっているわけでもない、いわば虚業よ。支配階級はその聖性を認めていたけれど、一般的に世間からさげすまれ、食うや食わずのその日暮らし。だから、元はエリートなんだぞという心のよりどころでもないやっつけられないわ。皇族の端くれなんだぞというのは、すべて、後世の同じ職にある人々の捏造、願望、でっち上げ」

キリコさんの弁舌が白熱してきたというわけではないけれど、静かに淡々と語っている



ようだけれど、話がとんでもなく長引きそう  
で、だからここにやって来たのだが、それ  
もなんだか少し、ぼくは後悔し始めていた。  
「……だから、聖なるものへの畏れや、そ  
う働きかけもあって、蟬丸の霊がここに合  
祀され、円融天皇の九七一年五月には繪旨に  
より音曲芸能神となったの。蟬丸、四代目滿  
市坊が生きていたとしたら、一三〇歳。藤原  
氏が政界を独占する時期よ。しかしねえ、も  
うこのころには蟬丸はたくさんいたわ。連綿  
と、また空間的にはこの逢坂山周辺に。ジ  
ジー、ジジーと、いい喉してたんじゃない  
かしら。琵琶もよし、語りもよし。蟬丸とい  
うのは、琵琶演奏をする盲僧の、これは一般  
名詞ね。その中から『これやこの……』の歌  
も生まれてきたの」

「へーえ、NHKの歴史番組なみですよ。すご  
いですね、キリコさん」  
ぼくは茶々を入れるつもりではなかった。  
本当にそう思ったのだ。でも、キリコさんは  
しおらしくった。  
「ごめんね、話が長引いちやって。私の中の  
サカガミが蟬丸のことを言わせているの。だ  
って、今の話の中にサカガミ自身は出てき  
た？」  
そう言えばあんまり出てこなかった。蟬丸  
中心だ。  
「サカガミはずっと、この逢坂山辺りの歴史  
を、世の盛衰を観てきたの、ひそかに。そし  
て今、私に語らせている。今、あたしは一  
九四歳」  
ここで初めてキリコさんが微笑んだ。眼が  
潤っている。眼の中にもスキップパーカラーの  
白いブラウスと黒のタイトスカートが嵌め込  
まれているようだ。  
「実はね、このときの二人の惹かれ合うさま  
は、およそ三五〇年後の『東北院職人歌合』  
という絵巻のなかに、巫女と盲僧の歌比べと  
して出てくるのよ。作者は分からない。著名  
な歌人の戯作かもしれない。でも、サカガミ  
と蟬丸、犬丸のね、その思いが脈々と流れ込  
んでいるとしか思えない。サカガミがそう言  
っているの。……これは次の機会にね。……

あのときも途中で終わっちゃった私の発表  
会、あらためて夜にちゃんとやろうよ」  
キリコさんはどうやら本気らしい。目が輝  
いている。  
「あの夜の蟬丸とサカガミの続き、語ってあ  
げる。二人はどうするのか。シンガオくんは  
宿題を出しておくわ。『おおかたのさわりも  
知らず入る月よひくしめ縄を越ゆなゆめゆ  
め』という巫女の和歌よ。この歌の意味、考  
えておいてね。大丈夫、この文句、後でライ  
ンで送るから。日時はね、八月二十九日の火  
曜日、午後六時半、ほぼ日没の時間よ。もつ  
とも、ここは山中だから太陽はとくに沈ん  
じゃってるとは思うけどね。晴ればいいけ  
どなあ。あ、日時も念のためラインしておく」  
独りよがり、勝手に決めてしまう。  
晩夏の夕刻、上社に人気はなく、静まり返  
っていた。  
国道を休みなくというか、数珠つなぎに往  
来する車の通行音はもちろんおびただしいの  
だが、それが、拝殿にいるぼくたちと祭神に  
とっては、単なる下界の必要音という印象だ。  
それに神域での演奏や語りの声は、しもじも  
に届く前にかき消されてしまうだろう。  
ヒグラシとツクツクボーシの交響楽に交じ

って、もう秋の虫たちが鳴き始めている。社殿の背後はすぐ山で、夕日をとうに隠してしまっている。空は墨をどんだん流し込んでくる。

キリコさんの今日のいでたちは、ごく普通の若い女性の姿という感じで、もちろん老婆メイクではなかった。デニムワイドパンツにスニーカー、白のTシャツの上にはモスグリーン色の薄いカットソージャケットを羽織っていた。

二人で、ああでもないこうでもない、一応「公演」の準備をしたが、あつというまに終わった。

キリコさんは、蟬丸のお話の続きを語る前に、あの歌の解釈を求めた。

「……じゃ、まず宿題ね。『東北院職人歌合』に収められている歌の意味よ。『おおかたのさわりも知らず入る月よひくしめ縄を越ゆなゆめゆめ』」

ぼくはちよつと考えてから、こう言った。「沈んでいく月に対して神聖なしめ縄を越えるな、と言っているのは分かるんだけどなあ。『さわり』が何を意味するのか……。普通、支障、差し障りという意味でしょ。『月の触り』もあるし」

そう言ったあと、そんなことは気にしないはずのキリコさんだが、ぼくは少し気になっ

た。だから、あわててこう付け足した。

「歌なんかで、一番いいところを『さわり』とも言いますし、これがよく分からない……。『おおかたの』もどういうことを言っているのだから」

「琴や琵琶で、弦がビーンと重奏することも『さわり』と言うのよ」

キリコさんがうれしそうな顔して教えてくれる。

「あのさあ、シンガオくん。沈む月って何時頃に沈む月？君はどう思う」

「満月なら、朝六時頃。確か『菜の花や月は東に日は西に』という蕪村の句がありますよね。満月は夕方出て、朝になると沈みます」

「常識よね」

キリコさんはぼくに顔を向けて、いたずらっぽく言った。ぼくはちよつと傷ついた。そうしてまたぼくにゆっくり顔を向けた。

「それでね、シンガオくん。この歌において、月が沈むのは何時くらいって感じ？夜よねえ、夜、何時くらいがいい？」

「夕方六時くらいに上ってきて、明け方沈む満月だったら、逆に一晩中月に見られているようだし、『入る月』の意味があんまりないようにぼくは思っちゃいますね。夜になってすぐ沈む月も、月のない晩になっちゃうし、どうかなあ。それに真夜中に出てくる月もい

けない」

「いいところを突いているわ。いつの時代も宵は人間にとつて、さあ寝ようという時間だけじゃなく、昼間の生業から解放された人々が、ほつと一息つき、親子兄弟語り合い、それに男女が睦み合う、月を眺めて自身を振り返り、内省することもあっていい。そんな時間なのよね。だから夜のかかりに月はあつた方がいい。闇夜でも、一晩中満月でも、私はよくないと思う」

「じゃ、三日月か半月？」

「私、月の満ち欠けについて調べたのよ。『暦博士』というウェブサイトで。でね、半月、八日目くらいの上弦の月は、お昼の十二時くらいに空にあつて、午後十一時半頃には入る月よ。だから私は、この『入る月』は上弦の月だと思ふ。夜の最深部になると月も闇に去るのがいいと思うの。だからね、今日を選んだの。今夜は月齢七・四の半月。さつき言つたように、ちようど今日という一日の終わり頃に沈んでしまう月なの。……でも、今夜は、もつと早く帰るつもり。第一、西からの山肌が覆いかぶさっているようなこんな山中じゃ、もう月は見えないでしょ、ね。そしてね、私、明日があるからさあ。夏休みの終わりのここんところ、『ビューロン』もけっこう予約一杯。私、明日は十時乗船。九時には行

つとかなくちゃね。クルーズが四回連続で、ラストは四時半終了、みっちりなの」

「深夜のここ、不気味な感じになりそうだから、ぼくもそれでいいですよ」

「では、そういうことで。でも、まだ少し時間もあることだし、……『ひくしめ縄』の意味は？ゆめゆめ越えるな、の意味は分かるだろうけど」

「これはやはり、巫女さんがしめ縄をひく、ということでしょう」

「そうね、ここから神域、聖域ということ。タブーよね、入ってきちゃダメということ」

「キリコさん、『さわり』は？あの解釈でいいの？」

「これはね、正直私もよく分からない。生理のことを言ってるのかなとも思うんだけど、夜暗いのを、暗いままで秘め事を隠しておいてほしいのを、月がすきなく照らしちゃうというところかしら、差し障りも何もあつたものじゃないっていうふうな」

「この歌、巫女さんのガードが固いですよね」

「そうね。じゃ、私の解釈よ」

「お願いします」  
「なんだか授業みたいだ。  
「……避けて通る差し障りもあらばこそ、月は皓々と万象を照らし行き、そうしておいて夜半に山の端に沈んでいく。この神の子の私

の寝乱れ姿さえ浮かび上がらせる。満ちることのないわが身のような半月よ。恨めしいつたらありやしない。……でもね、私をなぐさみものにしてもいいけど、このほぞの紐は断じて越えてはならぬ。……お前もだよ、オツツキさん」

「うーん、でも、ここは額面通り受け取って、私は随ちないよ、指一本触れちゃいけないよ、との気持ちをもっと汲んだほうがいいと思いますよ。キリコさんの解釈、あいまいな気がする。ちよつと無理があるような……」

「そーお？」  
キリコさんは不服そうだった。

「あ、それで、……あの夜の二人のようす、聞かせてくださいよ」

ぼくはあわてて、話をそらした。いや、本題を語ってもらおう方向に戻したつもりだった。

「そうね。じゃ、最後」  
ここでキリコさんはささらをやや長めに操り、ゆつくり語りだした。

「……抱え持つ琵琶の代わりにサカガミを抱きたいと、いつになく身を近づけていき、……この世で願いの叶わぬものなれば、いっそ土竜もぐらになりたし地をくぐりたし、闇に生きて土に抱かれん。……蟬丸はそう言ってサカガミに迫つたのよ。サカガミはなかなば蟬丸の

かいなに身を預けつつ、そつと首を引き寄せ左の目に口づける。そして諭すように言ったのよ。……女の盛りなるは、十四五六歳二十三四とか、三十四五にしなりぬれば、紅葉の下葉しとばに異ならず、つてね。その時ね、天空に一閃、電光夜空を切り裂き、あかあかと走り給いし鳴神みこころの、御心かしこし……蟬丸がひとつ、まばたきすると、眼に映つたの」

「サカガミが？」  
「そう、目の前の女性の顔」

「蟬丸は、はつきりとそれを見たんですね。ずつと忘れていた感覚」

「においと声と、触れることだけでしか知りえなかった、懐かしいものの影よ」

「一瞬だけ？」  
「そうよ、ほんのいつとき」

キリコさんは目を閉じた。  
「蟬丸はゆつくり深呼吸して、こう言ったわ

……美女うち見れば、一本葛かずらにもなりなばやともぞ思う、本もとより末すえまで縊かすらられればや、切るとも刻むとも離れがたきはわが宿世すくせ。……姉の神々しい姿は、弟の眼底から背筋を通り抜け、下半身に至り、男の身を熱くとりけさせたのよ、音のない落雷らくらいみたい。……でも、稲妻は、もう二度と走らなかつた。闇がまた、きつぱりと漆黒のカーテンを閉めたの。サカガミは静かに身を離すと、ふたたび鼓を打ち

始めた……」

「……………」

「……………」

また虫の音がする。ずっと鳴き続けていたのだろう、ぼくたちの話と関係なく。

「それから二人はどうなっていくの」

「次の日、サカガミはすべてを蟬丸に打ち明けた。宇佐神宮から授かった二人の命とその関係のすべてを。話を聞いて蟬丸は大粒の涙をぼろぼろ流して泣いたわ。それから二人手を取り合って、肩を抱き合って、お互いを確かめ合ったわ。サカガミは蟬丸の臉をさすり続けたわ。そしてそれからは、二人は完全に姉弟としての共同生活を築いていくの」

「二人きりの肉親ですしね」

「そうして、西暦八九〇年、サカガミが六十七歳で亡くなると、蟬丸も四十九歳で後を追うように亡くなったのよ。常楽院がその後どうなったかは分からない。私のサカガミは何も言ってくれない。今、逢坂山周辺に常楽院の痕跡はどこにもないの。『ふたがみ』というのは、のちの人が、この上社の左手に石の墓標を置いてとむらったものなの。二人愛用の鼓と琵琶を埋めてね。その辺りじゃないかしら」

キリコさんは、拝殿の横の倉庫を指さした。祭礼の時には社務所となるのだろう。壁には

パイプ椅子が何脚か立てかけられてあるし、神社めぐりのスタンブ台には虫よけのスプレーが数本用意してある。

「最後にひとつ質問、『これやこの』の歌は、四世満市坊蟬丸の作ということでもいいのですか」

「……そうね、逢坂山にいた蟬丸たちの誰かが作ったのか、いつからともなく俗謡のようになっているか、このあたりでそう言われていたのか、名のある歌人が名を隠して作ったのか、今となっては分からないけれど、『これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関』という歌が、作者を離れてとにかく人口に膾炙していったのね。だって、言葉も平易だし対句もあって朗誦しやすい。『逢坂』に込められた掛詞だって、子どもでも分かるほど簡単だし。それにね、この世のことをズバリ言っている。みんな、一期一会のお付き合い、誰しも生きては死んでいく」

「……シンガオくん。お互い、いつまでもコウガンのままでいたいよね」

ぼくは何のことか分からなかった。変な意味にもとれそうだ。

「あしたに紅顔ゆうべに白骨、だわよ」

そういえば昔、親戚の法事で浄土真宗の僧侶から聞いた言葉だ。

ぼくとキリコさんは、本殿をあらためて押込んで、石段を下りた。

そして今までの話を追想するように、ゆっくりと国道沿いの狭い歩道を下って行った。荷物が厄介だったが、そのまま歩き続けて、湖岸にある私鉄のターミナル駅にたどり着くということにしたのだ。

お互い、胸のうちを探りあっていたわけではけっしてないと思うが、二人とも口数少なかった。

国道が分岐して、北陸方面へ向かう国道をたどって行くようになった頃、思い出したようにキリコさんが切り出した。

「ところでシンガオくん、……これから私と付き合わない？」

これから付き合う？ 今晚どこかに遊びに行くということなのか、それとも今後キリコさんと特別な関係になるということなのか。

「私んちに来ない？」

「え、でも、お母さんがいらっしやるんでしょ」  
「母は今夜、深夜勤。ほら、あそこに見えるでしょ」

キリコさんが指さす左斜めの方向を見ると、ビルとビルの間から、遠方に赤いマークが夜空に浮かび上がっている。キリコさんのお母さんの勤め先、聖アンリ病院だ。

「……母はこれから十一時過ぎには家を出る

わ。明日の朝は九時半頃帰って来る。シンガ  
オくん、これからどこかで食事して、頃合い  
見計らって、それから一晩、うちでゆっくり  
していきなよ。どうせ一人暮らしなんですよ」  
ここを通る私鉄電車は、通常の線路から路  
面電車に切り替わるあたりでカーブする。そ  
の、レールと車輪がきしむ音が大きく弾んで  
聞こえる。

「だって、キリコさん、明日は仕事だとか……」  
「ぼかねえ、徹夜して起きているわけないで  
しょ」

「そうですよね」  
それはそうだ。それはぼくもあまり望まな  
い。

「あのねえ、私、さつき、君に付き合いを求  
めたのよ。あんまり女の子に恥をかかせない  
でよ」

「はい、すみません。行きます、行きます」  
ターミナル駅周辺の大きな交差点や飲食店  
街の灯りが、目もあやに輝いている。

「私の特別な弟になるんだよ」

「……サカガミの、ですよね」

「ふふ」

「……なんですか」

「ね、シンガオくん」

キリコさんは顔をぐっと近づけ、ぼくを見  
上げた。

「……しよう。一回だけ」

「……さつきの話みたいなのに、ですか」

かすれ声になってしまった。

「私がいじめ縄を引くかどうかは、君次第」

ぼくは両手の荷物を一つにして左手に持ち  
替え、右手でキリコさんの手をそっとにぎっ  
た。

「……弟の手って、案外力強いのね」

キリコさんは、夜のみずうみの方を眺めや  
り、「天空に一閃、電光夜空を切り裂き……」  
と口ずさみ始めた。

ぼくは逢坂山の方を振り返ってみる。

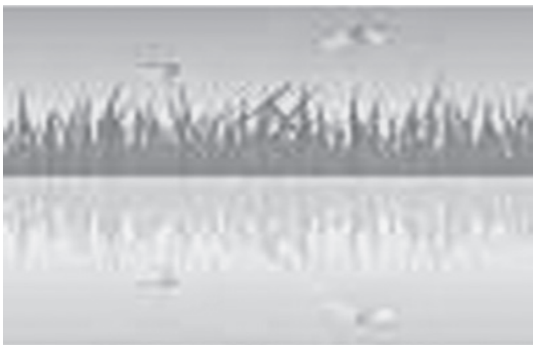
十数階建てのビジネスホテルが視界を遮っ  
ている。

月は山の向こうに隠れているのだろう。

(了)

\*作品中には一部『梁塵秘抄』より引用した  
詞章があります。

(評) 盲人琵琶法師蝉丸とその姉で巫女  
の逆髪。不遇にも離ればなれとなっ  
た姉弟の劇的な再会を史実に則り丁  
寧に解釈して創作し、現代の若い男  
女の恋と絡めて浪漫的に描き上げて  
いる。特選にふさわしい高水準の力  
作である。



## メッセージ

正法寺町  
高井 豊

わたしの猫、ルナは黒猫である。ルナという名前は月を意味する。最初に彼女の瞳を覗き込んだとき、きらつと金色に光ったように見えた。それがまるで月の光のようで頭にぴんときたのが「ルナ」だった。

彼女はわたしの住んでいるアパートの大家さんの家に五人？ 兄妹の一匹としてこの世に生を受けて、たまたま、家賃を払いに行った時がまさに運命の出会いの日となった。ちょうど彼らが生まれて三日目だったのだが、ルナは体が一番小さく、母親のおっぱい争奪戦に他の兄弟たちよりも一歩出遅れていた。その姿が自分とだぶって見えたのかもしれない。目の前にある小さな黒い物体がとても愛しく感じられて気がついたらしいの間に、かもうことになっていた。

五匹もの子猫をどうしようか途方に迷っていた大家さんは住んでいたアパートをペット可にしてくれたうえ、一週間分のキャットフードもつけて、生後一ヶ月になった頃を見計

らってルナをわたしに引き渡してくれた。真っ黒にうごめく物体から愛らしい活発な子猫に変身したルナは薄茶とブルーが混ざったような色の瞳をくるくるさせて、最初は部屋の中を不安そうに物色していた。クッションやテーブルなどをあちこち鼻を近づけてはくんと嗅ぎまわり、ひと通り嗅ぎまわって安心したのか、山吹色の布製のソファにもたれかかって座っていたわたしのもとに寄ってきた。同じようにわたしの体も、しばらく鼻を近づけて嗅ぎまわっていたが、やがて膝のうえにそうと乗ってきてわたしの顔を見て、「みゃー」と鳴いた。その表情のあまりのかわいさにわたしはつい母親になったような気分でもルナを抱きしめた。それからだから、彼女との付き合いはもう三年以上になる。

部屋はアパートの一階でそれこそ猫の額ほどの小さな庭がついている。この部屋を見に来たときがちょうど春で、前の住人がそのままにしていたのか赤や白や黄色のチューリップ、薄ピンクの桜草、濃い黄色のフリージア等が咲いていて小さなスミレが庭の隅こに群生していた。日当りはまあまあだったし、間取りもよかったので即決したのだが、我ながら今でも正解だったと思う。

その庭に実用的な食料となるプチトマトやニラ、レモンバームやカモミール、ミント等

のハーブをくわえてプチガーデニングを楽しんでいたが、そこがちょうどルナの遊び場になった。仕事の日はルナも家の中でおとなしく留守番のだけど、休みの日はいつもベランダの窓を開け放して庭に自由に出入るようになっているし、ルナは花に寄ってくる小さな虫を追いかけたり、花の匂いを嗅ぎまわったりして遊んでいた。しかし、半年も経つとだんだん後ろ足の力が強くなってジャンプの高さが少しずつ高くなっていく。塀の中ほどにある小さな出っばりを経由して、あわや塀の上に登ろうとするようにまですなってしまう。部屋のなかではすでに流し経由で食器棚の上にあがっている。自力で外に出られるようになるのは時間の問題だった。とはいえ、住んでいる街はそれほど都会でもないし、近くに林や公園もあるので猫を放し飼いにしている家も多い。大家さんに相談して、ルナが一才になる頃から外に出すようにした。

ルナが最初に行方不明になったのはいつだったろうか？最初に塀を越えて外に出るようになって二、三ヶ月経った頃だったろうか。いつものように外に出掛けていったものの、六時になっても七時になっても帰ってこなかった。さすがに若い女性の一人暮らしでは、遅い時間まで窓を開けっ放しにしておくこともできず、リビングに布団を持ってきて窓の

横に敷いて寝た。ルナが帰って来たら、爪で窓をカリカリとこするはずだから、すぐわかるように、という苦心の策だった。

しかし、ルナは戻ってこなかった。はたして眠れるわけもなく何度も何度もカーテンを引いてベランダの外を見ても、月の光でうっすらと庭の草花が浮かんで見えるだけで肝心のルナの姿はどこにもなかった。わたしは後悔のかたまりだった。とんでもない妄想だけが消してもかき消しても頭の中に浮かんでくる。結局、一睡もできずに朝を迎えたが愛猫の姿はなかった。

「あらあ、ルナちゃん夜遊びね。一晚くらい何てことないよ。うちの猫は三、四日くらい平気で帰ってこんしね、心配することはないよ」

朝になっていたたまれず、気がつくとき皆さんの家に電話していた。

「でも、今までたったの一度だって夜に帰ってこなかったことなんてないんです。迷子になっているのかもしれない。それとも、もしかしたら、もしかしたら、ルナは・・・」

今にも泣き出しそうな悲壮な声に大家さんもお手な気休めは言わない方がいいと思っただのか、静かな声で諭すように言った。

「まあ、もう少し様子ば見てみらんね。今日は仕事やる？縁側の上に水とキャットフード

のカリカリを置いときんしゃい。ルナがいつ帰ってもいいようにね。おばさんもちよくちよく様子ば見にいっちゃんやるけん、大丈夫よ。今日には帰ってくるって」

とても仕事に行く気分ではなかったが、大家さんが時々様子を窺ってくれると約束してくれたので、何かあったらすぐ携帯に電話をくれるようにと頼んで、後ろ髪をひかれるようにアパートを後にした。結局、ルナはその日の夕方に戻り事なきを得たのだが……。

その後は怖くてルナをしばらく外へは出せなかった。しかし、生まれてからずっと家の中で育てたのならともかく、外に出して育てた猫は閉じ込めると却ってストレスがたまるとし、良くないから、という大家さんの助言もあって決心したものの、かなり勇気がいった。実際、ルナは哀しげに鳴き続けて外に出たがるし、そんなルナを見るもの辛かったので最終的には折れざるをえなかった。

その内にルナが家を空けるのにも慣れてきた。必ず帰ってくるからという自信みたいなものが出てきたからかもしれないが、行方不明ではなく「旅行」に行っていると思うようにした。大家さんの「猫とはそういうもの」という根拠があるのかわからないがドバイスにも支えられているような気もする。

なんせ、彼女は生まれたときから家に猫がいたという環境で、これを仮に猫歴というならば、まさに猫歴六十五年というベテランなのだから。

そういえば最初に違和感を感じたのはいつだったろう。何度目かのルナの「旅行」ときだった。五月の終わりくらいだったろうか。ある日、いつものように四、五日姿を消して、いつの間にか帰って来て、何食わぬ顔をしてキャットフードを食べているルナの黒い体にピンク色の小さな花びらが何枚かついていてことがあった。よくよく見ると、桜の花びらのように見えるがソメイヨシノではないような気がする。ちよつと濃いピンク。このあたりには遅咲きの桜の木があるのだろうか。そのときはあまり深くは考えなかったが……。自分が知らないだけで、そういう品種の桜があるのかもしれないし、もしかしたら桜に似た別の品種かもしれないと。

そんなときにある事件が起こった。ノミ取りもかねて濃いブルーの合皮の首輪をルナにつけるようにしたのは、大家さんが外に出すなら首輪をつけないと野良猫に間違われたら大変だからと言われたのがきっかけだった。しかし、首輪をつけて、こともあるうに最初の「旅行」のときにその首輪はなくなってしまう。なくなったという言い方は正しく

ないかもしれないが、わたしがつけたブルーの首輪は他のものにすり替えられていたのだ。それは、なんと薄紫色のレンゲで編んだ首飾りだった。ルナの首に巻きつけられたそれを見たとき、なんともいえない不思議な気分だった。その時期もとてもレンゲなんか咲いていない季節じゃなかったし、その時、わたしの脳裏にいつかの季節はずれの桜の花びらが浮かんだ。

「ルナ、あんた、いつも一体どこで遊んでいるの？」

そう聞いてルナの顔に頬をよせ首をなでて、ルナは無邪気な顔でみやあと鳴くだけだった。

どちらにせよ、猫が自分で自分の首輪をはずしたり、レンゲの花を編んだりできる訳はないので、どこかの誰かが悪戯したのは間違いないかった。ノミ取り付きとはいえせつかくお気に入りだったブルーの首輪を勝手にはずすなんて……。

わたしはあることを思いついた。うまくいけば、いたずらの犯人もルナの行く先もわかるかもしれない。少々、時間はかかるかもしれないが、それしか方法が思い浮かばなかった。

次の日、家に帰ると便箋を目の前に座り込んだ。何て書いたら良いんだろう。そう、わ

たしが今からやろうとしていることは名前はもちろんのこと顔すらも知らない相手に宛てた手紙を書くことだった。

「へそこはどこですか？」

とても気になっていいることだが、これでは唐突すぎるだろうか。この手紙を書く主旨からはずれているかも……。

「へあなたは誰ですか？」

うーん。これは入れたい。なんせ、ルナの首輪を勝手にはずして悪戯なんぞをしている相手なのだから一番気になることではある。

そして、そのあとは……。

「へあなたは誰ですか？わたしのルナに勝手な悪戯をしないで下さい」

できた！ 相手がどこの誰かわからないのだ。あまり長い文章よりは、簡潔な内容の方がいいような気がした。わたしは手紙を小さく折りたたんでジッパー付きの小さなビニール袋に入れ、セロハンテープで買ったばかりのエメラルドグリーンの首輪に貼り付けた。

彼、もしくは彼女はルナの首輪につけたこの手紙に気付いてくれるだろうか？ でも、考えてみたらルナがいつも同じ場所に行くとは限らないし、返事が返ってくる保証もないのだけ……。でも、あの桜の花びらとレンゲの首飾り、その二つはどうしても切り離しては考えられないような気がした。

返事は意外と早く返ってきた。

わたしの気持ちを知ってか知らずか、ルナは次の日から二晩だけいなくなつて戻ってきた。この子はもしかしたら全てわかっているのかもしれない、等と思ってしまう。なぜなら、手紙を書いているのも横でじいっと見ているし、わたしの独り言も聞いているからだ。目的を察して、早々と手紙を届けに行ってくれたのかもしれないと思うのは気のせいだろうか。

首輪を見ると、わたしがつけたビニールの袋はきれいにはがされていて、代わりに油紙というのだろうか、薄い黄土色のバリバリとした感触の紙の中に小さく折りたたまれた手紙が入っていた。

「へ見ず知らずのあなた様からの突然のお手紙に大変驚いております。小生の猫はクロといいますが、二年程前にわが家に迷い込んできましたわが家の飼い猫です。徒歩三十分のところにある隣の家の他にはこのあたりには家はなかったと思われませんが、あなた様はどちらにお住まいの方ですか。沖田慎之介」

鉛筆書きのやつと読めるような小さな角張った字だった。名前は沖田慎之介、男性だ。しかし、このバカ丁寧な文面は何なんだろう。単に真面目なのか、人を馬鹿にしているのか。いや、それはおいといて、我が家の飼い猫？



何を勘違いしているんだろう。わたしはルナを生まれたときから知っている。それを、何だつて？ おまけにクロ？ そんな名前を勝手につけるなんて……。かーっと頭に血がのぼってわたしは思わず手紙を床に叩きつけた。

しかし、待てよ？ もう一度、手紙を拾いあげて読んでみた。「徒歩三十分の……」って、このあたりってどのあたりなんだ？ わたしのアパートのまわりは新興住宅地で一戸建ての家が多いが、少し離れるとマンションも建っているし、学校だってある。どこをどう考えれば、隣の家まで三十分もかかるような僻地にたどり着くんか。それも、車とかならともかく猫が走っていけるような範囲で……。すぐに紙とペンを手に持った。

ルナは生まれたときからわたしの猫です。もう三年以上わたしと一緒にいます。時々、いなくなるからどこに行っているのかと思ったりあなたの所に行っていたのね。こちらこそ、あなたがどこの人か知りたいわ。この辺は交通の便利な住宅地で人に会わない、地域なんてないんだから 池上志穂

長くなってしまいそうだったので、途中でやめた。文通じゃないんだから、と自分に言い聞かせた。それに、もしかしたら虚言癖のある変なやつかもしれない。文章を見る限り

はまともな人とは思えなかった。手紙をまた同じように小さく折られたんでビニールの袋に入れ、ルナの首につけた。

返事が返ってきたのは、一週間後だった。

池上志穂様 交通の便利な住宅地とはどういう意味ですか？ おっしゃっている意味がよくわかりません。我が家のまわりには何もありません。牧場があるだけで、見渡す限りの原野です。しかし、不思議なのはクロが何処から貴女のお手紙を運んでくるかということです。小生は狐にでも化かされているのでしょうか。 沖田慎之介

彼から返ってきた手紙をよくよく見ると、普通の良識ある人のようにも感じられる。でも、牧場？ 原野って？ まさか……？ わたしの方こそ狐につままれたような気分だった。窓の外には橙色の大きな太陽がまさに遠くの山に沈もうとしていた。わたしはルナをいつものように両手で抱きあげ胸に抱いて頭をなでながら、この不思議な一連の出来事について考えをめぐらしてみたら、どうしてもある仮説にいきついてしまう。でも、それはとても常識では考えられないことだった。

沖田慎之介様 もしあなたの言っていることが本当なら、もしかしたら、わたしたちはルナを通してとても不思議なことに遭遇しているのかもしれない。わたしは福岡に住

んでいます。 池上志穂

彼はこの手紙を見て何と思うだろう。自分でもとても常識的ではないと思うのだが、もしこの仮説が当たっているのならすべての謎が解けるはずだ。

沖田慎之介からの返事が返ってきたのはそれから十日後だった。

池上志穂様 小生は正直何をどう考えていいのかよくわかりません。ここは北海道の帯広です。貴女のおっしゃっていることが本当ならクロはどうやって貴女と小生のもとを往き来しているのか。不思議です。 沖田慎之介

文面からは彼の困惑した表情が目に見えるようだった。手紙の最後に住所が書いてあった。北海道……思った通りだった。ルナに関しては謎だらけだが、これで季節はずれの桜やレンゲの謎は解ける。ここ福岡は桜の開花はだいたい三月下旬から四月上旬だが、それは主にソメイヨシノの開花時期だ。北海道の桜にはエゾヤマザクラやチシマザクラ等ほかにいろいろな種類の桜があって、五月上旬から気温によっては六月上旬まで開花が遅れることもあるという。あの時、ルナの体についていたのはいつも見慣れたソメイヨシノとはちょっと違っていたようにみえるし、多分あれは北海道特有の遅咲きの桜なのだろう。

わたしはまた沖田慎之介宛に今度は長い手紙を書いた。

〔慎之介様 とても不思議な気分です。不思議といえばルナが二年程前に桜の花びらをつけて帰ったときもそう思ったのですが……。あれは五月の終わり頃だったと記憶しています。ここ福岡の桜はせいぜい四月中旬くらいで散ってしまいます。遅咲きの桜にしても遅すぎるし、実際この辺にはそんな桜はないし、でもそちらが帯広なら納得ですね。わたしは北海道には行ったことがありません。そちらは多分今が春なんですよ。北海道の桜、一度見てみたい〕

ルナを通じて不思議な体験を共有しているせいかな、いつの間にか親しみみたいなものを彼に感じていた。彼もきつとそうなのだろう。手紙の文面が前より少しくだけていた。

〔志穂様 お察しのとおり北海道は、とっても広いのですが、ここ帯広は春です。桜の種類は多くは知らないけどエゾヤマザクラというのがこの辺の桜の種類のようにです。あと、これは桜ではないのですが、シバザクラといってまるでピンクの絨毯のような花が地面いっぱい咲きます。とてもきれいですよ。見せてあげたいです。あとは牧場くらいでもない所ですが……。このご時世ですから状況に何らかの決着がつかない限りは、しばらく

くは難しいでしょうが、そのうちにお会いしたいですね〕

わたしの耳の奥でさわさわと風の吹く音が聞こえた。見渡す限りの緑、北海道の雄大な草原を風がさーっと吹き抜けていく音。それは見たこともないはずの慎之介が住んでいる北海道の風景だった。わたしは目を閉じて深く息を吸った。何か小さなものが動いている。よくよく見てみると放牧された茶色の牛と白に黒のまだらの牛がのんびり緑の草を食べている。その横で子牛が母牛にじゃれあっている。さそうに尻尾で追いやられている。そして、あれは何だろう？変わった建物、赤や青の屋根、何かの本で見た。そう、「サイロ」だ。わたしはしばらくの間、いつか行くであろう北海道の地へと思いを馳せていた。

わたしたちはルナを通してその後も何度か手紙のやりとりをした。内容はたわいのないことばかりだった。住んでいるアパートは春日原という所で、絵を描くのが好きでよくスケッチブックを持って小旅行に行くことなど。

慎之介からも家は牧場をやっていること、近くに大きなエゾヤマザクラの木があつて五月には見事な桜が咲くこと、妹が志穂に会いたいといっていること、自分も絵が好きで風景画をよく描いているということなど、お互

いのことをいろいろと手紙で語りあつた。そして、例の蓮華の首飾りは十歳違いの妹がクロに似合う、と言つてつけたものだと言つてあるのを見て、つい笑つてしまつた。ルナの気分次第で時には、一、二か月届かないこともあつたが、猫を仲介したゆっくりした手紙のやりとりはいつの間にか一年近くの月日を重ねていた。

ある風の強い午後だった。珍しく二週間以上も姿を消していたルナが、アパートの縁側に倒れていたのを見つけたときは心臓が止まりそうだった。

「ルナ！」  
震える手でそうつと抱き上げると温かい。  
「良かった……。生きてる」

安心したのもつかの間、ルナは気付いて薄目を開けたが、鳴く気力もなくぐったりしていた。わたしはルナをバスタオルでくるみ、すぐに近所の動物病院へ連れていった。獣医の先生が言うには少し風邪気味だけどそんなに心配することはないだろうということだったが、感染症の疑いもあるので、念のため、血液と排泄物の検査をしておきましょう、と言われた。とりあえず、ルナを家に連れて帰ってケージから出したとき、わたしはルナの首輪についている慎之介の手紙に気が付いた。ルナをクッションの上にそうつと寝かせ

ると逸る気持ちをおさえながら彼の手紙を開いた。それは信じがたい内容だった。

（池上志穂様。とうとう赤紙がきました。

出征です。小生は明日にはここを発って札幌の駐屯地に行かなくてはなりません。その後、どこに配属されるかはわかりません。短い間でしたが、志穂さんとの文通は楽しかった。クロには迷惑だったかもしれないけどね。でも、貴女に会えなかったのが心残りではありません。もし、小生が運良く、生きながらえたら、是非ここで会いたいな。いつか言っていましたよ、この桜が見たいって。とても大きなエゾヤマザクラの木があるからすぐわかると思いますよ。戦争が終るのが一年後か五年後か、もしかしたらもっと先かわからないが、必ずお会いしましょう。その時を楽しみに、小生はきつと生きて帰ってきます。

沖田慎之介

わたしはしばらく、ことの詳細が呑み込めなかった。頭の中の大事な部分に鉛のようなものが詰め込まれた感じで、何かを考えようとしてもずるずると重く引きずるだけで、頭が全然まわらなかつた。この手紙は一体何なのか？ 赤紙？ 戦争？ 手の震えが止まらなかつた。今まで胸の片隅にあった小さな違和感が形となって目の前に現れた、そんな感じだった。慎之介は北海道という遠く離れ

た場所にいるだけでなく、時間さえもほぼ六十二年前という遠い過去に存在している人だった。

わたしはルナの方を見た。ルナはまるで死んだようにぴくりとも身動きせず、昏々と眠り続けている。こんなことは初めてだった。

ルナは慎之介の出征を見送ったのだろうか？ 全てを見届けたうえで戻ってきたのだろうか？ か、もしルナが人間の言葉を話せたら、目覚めたら聞きたいことがたくさんあるのに……。

時々、ルナの首のあたりに手を当てて脈があるのを確認しながら、何となく確信めいたものが後から後から胸の中に沸き上がってくる。多分、もうルナは慎之介がいたあの北海道には行くことはないだろう。そんな気がしてならなかつた。

ルナは一週間以上眠り続けた。ルナの寝顔を見ながらとうとうとしていたわたしは妙な夢を見た。月明かりの中、白っぽい大きな影が遠くにぼんやりと見える。いつの間にかわたしの腕の中にいたルナが目の前に立っていて何度もちらを振り向きながら先を歩いている。ルナに付いて歩いていくとその影がやがてピンクの桜の大木であることがはっきりとわかってきた。目を凝らすと誰かが木の下で手を振っている。ルナは急に走り出し、その

人の足元にじゃれついた。そよそよとどこからか風が吹いてきて、桜の花びらがまるで雪のように舞いだした。桜の花びらの向こうに笑っている彼の顔がはつきり見えた気がした。

「慎之介さん！」

自分の叫んだ声で目が覚めた。見覚えのある白い天井の小さいしみとルナの顔が一瞬視界に入って、反射的に体を起こそうとするルナの丸い瞳が心配そうにわたしの顔を覗き込んでるのがわかつた。ルナは膝の上にそわりと乗ってくると、みやあと小さな声で鳴いた。

「良かった。元気になったのね」

わたしはルナをそうつと抱きしめた。涙が溢れて止まらなかつた。

次の土曜日、わたしはルナを連れて帯広に向つた。慎之介の手紙を受け取ってから、気がせて仕方がなかつたが、ルナの状態が良くなるのを待つて決行した。六月も下旬にさしかかろうとしていた。彼が見せたいと言っていた桜はもうとっくに散っているだろうが、とても来年までは待てなかつたのだ。慎之介が会おうと言っていたあの場所へどうしてすぐ行きたかつた。

飛行機で千歳空港まで飛んで、何度か汽車を乗り継いで帯広駅に着いた。慎之介が書い

た住所は町名変更で少しばかり変わっていたが市役所で調べてもらって、だいたいのところはわかっていった。

タクシーに乗り込み行く先を告げるとわたしはぼんやりと窓の外の風景を眺めていた。駅前から続いた街並みはすぐに緑の草原に変わり、時々遠くにところどころ赤い屋根や青い屋根が見える。放牧された牛や馬の姿が窓の後ろに消えていった。草原の波間をまるで舟ですべてているような感じだった。目に沁みるような鮮やかな緑が太陽の光できらきらと輝いている。

その時、緑の中にひととき大きな薄紅色の塊がわたしの視界を一瞬とらえた。

「止めてくださいー！」

ほとんど叫び声に近かったのであろうわたしの声にびつくりした運転手は急ブレーキで車を止めた。

ひと目でそれだとわかった。わたしの目の前には夢にまで見たあのエゾヤマザクラの大木がピンクの花びらを少しずつ散らしながらそこに確かに存在していた。ルナがケージの中で急に騒ぎ出したので開けてやると勢よく飛び出して跳ね回っている。ルナにとつてはついこの間まで来ていた場所、という感覚なのだろうか。

木の下に誰かが立っている。わたしはいっ

か見た夢を思い出していた。もしかしたらあの人は……？　しかし期待はすぐに裏切られた。遠目にもその人が女性であることがわかったからだ。白髪であることからかなりのお年の人のようだ。六十歳、七十歳くらいだろうか。ルナがその老婦人の足元にじゃれついでいて、彼女はルナを抱き上げてうれしそうに胸に抱きしめて頬擦りしている。この人は……？

老婦人は振り向くとルナを抱いたまま、こちらに歩いてきた。

「志穂さん？　池上志穂さんね。きつと来てくれると信じていたわ。わたしは沖田慎之介の妹でミサといいます。やっとお会いできたのね」

やっぱり……、何となくそんな気がしていた。十歳違いの慎之介の妹。ルナがなつくのも納得だった。わたしの次の言葉を察してか、ミサが口を開いた。

「兄は戦死しました。ビルマの前線でした。ごめんなさいね、あなたとここで会う約束を守れなくて……」

ミサはルナの頭をなでながら話を続けた。「兄のことをあなたに話さなくてはね。兄はいつもあなたの手紙をうれしそうに読んでいたわ。不思議だ、不思議だって言いながら、でも、このクロドコからあなたの手紙を運

んでくるんですものね。信じないわけにはいかないわよね。わたしは、当時、中学生だったけど、兄からあなたの話をいつも聞いていたのよ……」

ミサは小さく息を吸った。

「出征する日の朝、ちようど満開のこの桜の前に立って、兄はしばらく考え事をしていたわ。そして、そう今みたいにわたしが抱いていたクロの首輪にいつものように手紙をつけてると、これが最後だ、頼むよ、と言ってクロの頭をなでていたわ。兄はもしかしたら自分の運命を察していたのかもしれないわね」

わたしは何も言えず、ただ聞いていた。「兄は知っていたのかしら？　あなたがあの当時ではなく、そう六十二年後の今の福岡に存在する人だってこと」

「え……？」

わたしは息を呑んだ。それこそわたしが知りたいことだった。彼は気付いていたのだろうか。そして、ミサはなぜ今日この場所に来たのだろうか。

「兄の戦死の知らせがきた後、わたしはあなたにすぐ手紙を書いたけど、返事はとうとう返ってこなかった。戦況もかなり厳しくなってきたときだったから、あなたのもとに届かなかったのかもしれないと思っていただけ、その後、わたしはすでに形見となって

しまった兄の手紙を読み返してみたの。今となれば当たり前のことだけど、不思議なことがいろいろ書かれていたわ。アパート、一人暮らし、ガーデニング、とかね。そして、あなたの住所も番地もまだ存在しないんだって、何となく察したの。どの手紙にも日付が書かれていないからあなたのいる場所が何年位先なのか全然わからなかった。でも、札幌にそのうち団地ができて、アパートができて地方からでてきた若い人が一人暮らしをするようになった。もちろん家族連れの転勤族も住んでいるけどね。テレビが普及して全国のニュースが手に取るようにわかるようになって、あなたのいる時代にだんだん近づいているのがわかったわ。でもね、そのときがきたら兄が何らかのメッセージをくれるんじゃないかと思っていたの。あなたが来ることを知らせるためにね」

「メッセージ？」

「そう、メッセージ。どんな形か見当もつかなかったけどね。この桜ね、いつもは五月の半ばから終わりには咲くのよ。遅くても六月の初めが限度ね。でも、今年に限ってなかなか咲かないの。皆は不思議がってたけど、わたしは、きっと今年がその年なんだって思った。志穂さんがもうすぐ来るって。兄はあなたによほどこの桜を見せたかったのね」

「え……？」

「兄はあなたとの約束をしたのでしょ？  
この桜の下で会おうって。その約束は果たせなかったから、せめて満開の桜をあなたに見せたかったのではないかしら」  
頬にふれる桜の花びらと一緒に慎之介の気持ちはせつないほど伝わってくるようだった。

—この桜の下で必ず会おう。その時を楽しみに、小生はきつと生きて帰ってくるよ—

終

(評) 一匹の猫を郵便配達人に、時空を超えた二人の男女の摩訶不思議な文通。桜の木も舞台背景として効果的だ。互いに携帯等の電話番号を聞けばもつと早く解決しようという不満は残るが、心温まるファンタジーである。

## 《総評》

今回は三作の応募ながらも、特選と入選の二作はともに読み応えある秀作であった。特選作は数多くの文献をもとに史実を踏まえ、その上に筆者の想像力を重ねて新たな蟬丸伝説を創り出している。歴史を扱う場合は、どこまで史実を曲げるか慎重であらねばならないが、特選作は現代女性の語りを通してるので創り話に無理がない。一方、入選作は文献に頼らず筆者の発想力だけで描き切っている。飼猫の気まぐれな習性をモチーフに、時空を超えて猫が二人の主人の手紙の配達人役を担うという設定は実に面白い。こんな面白い発想の出来る才能があるなら、もっとリアルティを添えてほしかった。今やスマホ、メールの時代だ。それを使えないから猫の配達人なのだとすると、そこを描くべきだ。どうせ時空を超えて存在する桜を出すなら、猫のタイムトラベルは桜の大木の洞を通り道にしてほしかった。唐突すぎる慎之介の妹の出現にも必然性を持たせたい。そこらが修正されれば間違いなく特選作に比肩する作品になったと思う。次回作に期待したい。

井上 次雄